未来（あした）へつなぐ

【安全への取り組み】

文＝本間 吾里砂

「踏切事故防止キャンペーン」を展開！踏切手前での確実な一旦停止と安全確認を呼びかけ、”踏切事故ゼロ“を目指す

人命にかかわるだけでなく、列車の運行にも多大な影響を及ぼす踏切事故。その多くが、警報機が鳴っている踏切を車が無理に通行しようとしたことが原因です。遮断ポールの折損も道内では毎年数百件に上り、これも車が強引に踏切を突っ切ったことによるもの。一歩間違えば大事故にもつながりかねません。

JR北海道では”踏切事故ゼロ“を目標に掲げ、踏切手前での確実な一旦停止と安全確認の呼びかけを、年四回の「踏切事故防止キャンペーン」と毎月二十三日の「踏切の日」に実施しています。期間中は踏切や駅頭でパンフレットを配布したり、駅構内や車内で放送をかけたり、テレビやラジオでコマーシャルを流したりと、広く踏切事故防止をアピール。

1月の厳冬期と、春・秋・冬は交通安全運動に合わせて行われる「踏切事故防止キャンペーン」。踏切通行者への啓発活動を展開

遠くからでもよくわかるオーバーハング型警報装置が設置された踏切

列車は遮断機が降り始めてからわずか三十秒ほどで踏切に到達します。そのため、「まだ渡れる」「まだ間に合う」といった判断は大変危険です。警報機が鳴っている踏切には入らないのが交通安全の基本ルール。ただ、脱輪など思わぬトラブルに見舞われ、踏切内で動けなくなったときはどう対処すればいいのでしょうか。重要なのは、まず車から降りて踏切に設置されている非常ボタンか自動車の発煙筒で列車の運転士に異常を知らせること。なお、遮断ポールにさえぎられ踏切内に閉じ込められてしまっても車が動ける状態なら、そのまま車を進めれば、遮断ポールが斜めに押し出され、簡単に踏切から脱出することができます。また踏切には必ず無料のフリーダイヤルが表示されており、それを活用すれば列車の運行管理を行う指令センターに直接通報することも可能です。

万が一のとき、列車の運転士に異常を知らせる踏切の非常ボタン

こうしたトラブルを目撃した場合も、当事者に代わって非常ボタン、フリーダイヤルにて迅速に知らせることが事故を未然に防ぐ最善の方法。

近年は踏切を廃止し、立体交差へと整備が進む道路も増え、踏切の数は減少傾向にあります。平成二十三年には、函館本線野幌駅付近の踏切も高架事業によって廃止される予定。また、踏切内で車が立ち往生しているのを自動的に検知してその状態を知らせる装置の設置、非常ボタンの増設や改良、高さ制限を超えたトラックなどの走行を防ぐとともに遠くからでもよくわかるオーバーハング型警報装置の設置など、設備面からもさまざまな対策を講じています。